

寛

保元年西

三月 河蘭陀本草和解 野呂元文沙記

主年春内吉良役事 和蘭學受玉著手第一書

此書名「アーチン」ノハシテ「アーチン」ノサル記ヘテ「シリバ」
ト「アーチン」ノハシテ「アーチン」ノサル記ヘテ「シリバ」
此書物馬作ノハシテ「アーチン」ノサル記ヘテ「シリバ」
此書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」
此書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」
此書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」

猪飼坐之達
本は於中止
本は於中止

一七四一	同二年戊子	三月和蘭貨幣考 青木文藏折 和蘭文字考和蘭人等ハシタ和蘭金銀銅銀ノ通貨ノ開闢ノ因リ一舟トナレ夏重荷ヲ所記シ和蘭貨幣考ト名シ 阿蘭陀本草和解 野呂元太所記 本書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」
------	-------	--

一七四二	同二年戊子	三月和蘭貨幣考 青木文藏折 和蘭文字考和蘭人等ハシタ和蘭金銀銅銀ノ通貨ノ開闢ノ因リ一舟トナレ夏重荷ヲ所記シ和蘭貨幣考ト名シ 阿蘭陀本草和解 野呂元太所記 本書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」
------	-------	--

一七四三	同三年庚寅	三月和蘭譯 青木文藏撰 和蘭學文科第一書 和蘭陀文字考和蘭人等ハシタ和蘭金銀銅銀ノ通貨ノ開闢ノ因リ一舟トナレ夏重荷ヲ所記シ和蘭貨幣考ト名シ 阿蘭陀本草和解 野呂元太所記 本書所載二十三種名品和蘭名譜名及和蘭名前書之別ナリ。其文字多ハラテ「アーチン」ノハシテ「シリバ」
一七四四	同四年壬辰	天文臺立江戸神田佐久間町ニ建て將軍親製の簡天儀を置く 天文臺立江戸神田佐久間町ニ建て將軍親製の簡天儀を置く 天文臺立江戸神田佐久間町ニ建て將軍親製の簡天儀を置く
一七四五	同五年癸卯	和蘭譯後集 青木文藏著 和蘭譯後集 青木文藏著 和蘭譯後集 青木文藏著
一七四五	同五年癸卯	青木文藏心官眼を賜て長崎に往き阿蘭陀文字考研究す仍り復命進覧 青木文藏心官眼を賜て長崎に往き阿蘭陀文字考研究す仍り復命進覧 青木文藏心官眼を賜て長崎に往き阿蘭陀文字考研究す仍り復命進覧

五
四

蘭文譯第一集 青木文藏撰

原文
原書へテラスヌムモナシ。小説中の文義故訛る事無叶フ而一典存す。其ノ解説は「其ノ解説」の事。此書第一と二集の相違ノ故に書名を括く。

和蘭文譯第一集 青木文藏撰
此書成于康熙丙午年正月三日
原書又名「和蘭文意訛詁」
其卷之三集八集九集十集之五冊
而一冊之筆記存于其下
其年四月推丁酉歲之次年第一集之相當
其時下之見者
故書名之
并附其書名于後

二月天文方濟川六藏等改居御用子で京都子上。四月押町上皇廟御因て中途歸東
和蘭文譯第二集不傳。吉木文藏撰
阿蘭陀本草和解。野呂元文撰
江ノ朝御用子の上京せしもの。然るに詔閣へ遷ひ唐東す六藏等を以て高麗書先拂其後を承り故書所用也。總承す
李吉甫所著。蓋乎此其才十数枚。其著述已不如其事而明。年有絕後矣。其和解。言と上進。追々りしれ。其家業又多。其筆。既了其譜文。友
生。皆以水附。而其子。即。修。之。得。之。一。詔。不。傳。此。亦。物。也。山。後。諸。山。此。書。有。此。句。又。五。日。手。自。抄。寫。得。王。父。神。位。不。傳。云。世。故。修。耳。其。名。不。傳。其。書。
江ノ朝御用子の上京せしもの。然るに詔閣へ遷ひ唐東す六藏等を以て高麗書先拂其後を承り故書所用也。總承す
李吉甫所著。蓋乎此其才十数枚。其著述已不如其事而明。年有絕後矣。其和解。言と上進。追々りしれ。其家業又多。其筆。既了其譜文。友
生。皆以水附。而其子。即。修。之。得。之。一。詔。不。傳。此。亦。物。也。山。後。諸。山。此。書。有。此。句。又。五。日。手。自。抄。寫。得。王。父。神。位。不。傳。云。世。故。修。耳。其。名。不。傳。其。書。

四月和蘭文譯第九集 今春スペルコンストン内閣モノト	青木文藏撰
六月天測御用濟ニテ法川圖書山路彌左衛門寺歸府	
九月江戸天文臺を廢す設置より十四年	

是月田村元雄上藥物會を湯島ニ開く明年又神田ニ開く物品陳列會の始
小濱謹齋杉田玄白五阿蘭陀流外科を以て醫業を聞く
去白名異多鶴齋祖父市仙以漢方選擇酒井復吉外科を傳ひ人之區宮西去其の號ト和蘭医方主學小走平侯より別傳を給ひた
和蘭甲斐丹の一行多大坂にて竹田カラノリを觀て嘆嘆せし和蘭文あり八年半
吉津名所國會足利立見の島より平代相達シテ其無見ベシよ在教を越セリ
おらんた足利立見の島より日づみれだ大坂も勢く竹田カラノリ

一七五七	寅戌年八月
和蘭文譯第十集 青木文藏撰	

三月和蘭文譯第十集
今春スペルコンストン之内阿蘭陀人一間ノミタ記レテ和蘭文譯第十集ト云
本書所傳十集ノ丁止ム尼陽此から十一度次の明和甲申ハ治泰富詮ノ事五リ十一集以下有亡石保朱詩也

一七五八	寅戌年八月
和蘭文譯第十集 青木文藏撰	

八月和蘭人より本索ガ種子二万粒を齎来テ長崎ニ貿易ナ町年寄高木勘右衛門より是を
江戸ニ進献す
九月平賀源内上物産會を湯島ニ開く
此江年表室年間記事ノ稿子外國の船ノ事ノ記載多シ人情渡り中古及時つゝ櫻子ノ事主傳て京都大坂上に傳へシ近頃東都ニモ

一七五九	寅戌年九月同 辰巳年同
野呂元丈肖像義大休所馬元丈自題其絵壁 予生懐川京成城二十八掌住庚子春不來朝請御奉承詔御此因請第妻子衣公已歲面目蒙敷造焉意以吾喪知如已速罵敗之豈可不恐哉然可憐可詫也此君恩重大哉今夏 歲暮主計均通一食糧五千石紀州應侍士多乃御安了將軍近侍少少野呂青木と推處して和蘭字の從事セリム此人等らん 己亥十二歲「院君」大休所馬元丈是年七十二歲	三月戸田齊宮大技子物産會を開く品数二百四十一種文會錄入を著す明年又開會し 浪華物産目録を作 者吉田山滿前人區業三大技ノ開ノ月本草学ノ精ノ其門ノ後ノ草區齊宮、一小 四月家臣將軍十退職所世子家治一代將軍 昆陽漫錄、青木文藏、元丈以某ニテ餘年隨筆より和蘭記事二十五條あり

一七六〇	寅戌年十月同 辰巳年同
三月戸田齊宮大技子物産會を開く品数二百四十一種文會錄入を著す明年又開會し 浪華物産目録を作 者吉田山滿前人區業三大技ノ開ノ月本草学ノ精ノ其門ノ後ノ草區齊宮、一小 四月家臣將軍十退職所世子家治一代將軍 昆陽漫錄、青木文藏、元丈以某ニテ餘年隨筆より和蘭記事二十五條あり	

卷之三

周防醫人豐田養慶京都東山子於丁物産會之間
高松漫社平成、會津考語西漢之代、宿間詮久、大名ノ一ト、將軍ノ一ツ、次第參照

一七六一

物類品屬
平賀源內撰
前上次御在合併川端之三相模等一もの和名性事類別卷之二解説云

二月平賀源内始て火浣布を作り略説を刊行す中川淳庵の指導下に所作なり
大正六年春

一七六四